

## バフェット流投資の勧め

世界一の投資家であるウォーレン・バフェットの投資方針とは、業績が長期にわたって安定し、資本効率が高く、財務体質が優良で、株価は割安など、徹底的に業績や財務内容を分析して投資をする、マクロ経済よりもミクロを優先する投資法です。

最近テレビ出演で評判となった某投資信託運用会社も、業績の伸び率と資本効率を重視した銘柄選択を行っています。

当社もこれらの手法を参考に、成長性と健全性を重視した銘柄選択を行っています。4月11日付でこの手法により選択した参考銘柄は2か月で平均30%強のパフォーマンスとなりました。また、6月23日付の参考銘柄12銘柄の1つ「比較・com」はわずか10日で2倍となる高パフォーマンスでした。

政治経済など多くの情報に流されがちな投資環境の中で冷静にミクロの分析を行うことこそが、お客様の利益を最大化できる唯一の手段であると考えています。

### ※割安な半導体・有機EL関連銘柄

現在の参考銘柄12銘柄のうち、結果として5銘柄が半導体関連銘柄となっています。

米国ナスダック市場は現在調整中ですが、半導体を含むIT関連株が今年のけん引役であるとの期待は強いようで、IoTの広がり、人口知能(AI)チップの開発加速、次世代メモリー時代の到来などを考えると当然のことだろうと思います。

また、米国半導体指数構成銘柄の設備投資の合計額は売り上げの10%前後と過去に比べ安定しており、過剰投資の値崩れの可能性が低いため過去の半導体相場のように突然失速する可能性は低いと思われます。

米国半導体指数の株価収益率はS&P500指数を下回っており過熱感があるとは考えにくい状況ですし、我が国においても、半導体製造装置の代表企業である「東京エレクトロン」の7月10日現在のPERは15.6倍と過熱感はありません。

また、有機ELパネルはサムスン電子が圧倒的なシェアを持っていますが、来年以降は供給能力がサムスン1社では不足するだろうと言われていたうえに、将来は有機ELがすべての液晶パネルに取って代わる可能性も高いと考えるアナリストも増えてきたようです。パネル自体は韓国優位ですが、部材や製造装置は日本企業に強みがあります。

夏枯れと思われがちな相場環境ですが、半導体・有機EL関連銘柄が相場をけん引し、堅調なサマーラリーのスタートが目前なのかもしれません。

2017.7.11